

病氣対処術《パーキンソン病編》

パーキンソン病は、一八一七年にイギリスの医師ジェームズ・パーキンソンによって臨床的に見出され、一八八八年にフランスの医師によって命名されました。この病気では、姿勢保持障害や歩行障害、安静時の振戦(振るえ)、筋肉の固縮(固くなって動かし難くなる)、小字症(書字が小さくなる)、無動・動作緩慢などの運動機能症状や、便秘や流涎(よだれ)などの消化器症状、起立性低血圧や排尿障害などの自律神経症状、感情鈍麻や不安などの精神症状が起ります。

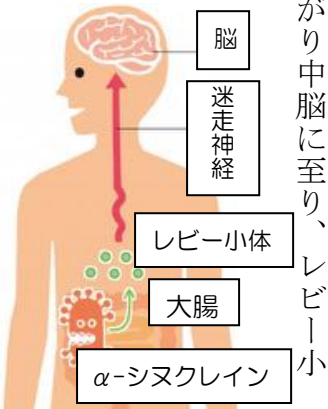
レビー小体が中脳の神経細胞を侵す



一九一三年にはフレデリック・レビーが中脳の黒質に病変があることを指摘しました。この病変はレビー小体と名付けられ、その後の研究で、 α -シヌクレインというタンパク質が凝集して、レビー小体を形成し、それが中脳などの神経細胞を侵すことが判明しました。それによって中脳の黒質にあるメラニン細胞で分泌されるドーパミンが減り、パーキンソン病を発症することが解明されました。ドーパミンは、脳内の神経伝達物質で、運動機能の調節やホルモンの調節、快不快の感情、意欲、学習などに関わっています。

さらに近年の研究で、 α -シヌクレインが凝集する反応は、鼻や腸の粘膜から神経を伝わって、少しずつ拡がり中脳に至り、レビー小体を形成することが解つてきました。

この現象が中脳から大脳に拡がることで、レビー小体型認知症を発症します。レビー小体型認知症は、パーキンソン病の身体症状の他に、幻視や睡眠時の異常行動などを起こします。



中脳は身体動作や姿勢を調整する

大脳は、自分の意思のもとに身体を動かします。小脳は、歩行や自転車乗りなど日常で無意識に行う身体の動作に関わり、身体のバランス感覚や姿勢保持を主につかさどっています。中脳など脳幹は、意識的に身体を動かそうとする大脳と、意識せず感覚的に身体を動かそうとする小脳との間で、身体動作を調整しています。

パーキンソン病では、特に中脳がダメージを受けることで、大脳からの意識的な動作の指令と、小脳からの無意識的な動作の指令が、正常に調整することができません。その結果、意識的に動かそうとしてもすぐに身体が動かない筋固縮や無動、動作緩慢、さらに一度動き出すと止まらない突進歩行や振戦などの現象が起るのです。このように身体の運動機能の制御が混乱した状態が、パーキンソン病の特徴です。

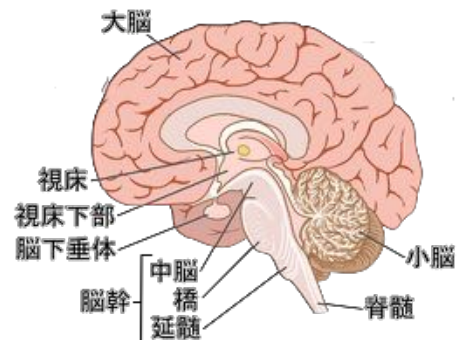
レビー小体が自律神経や嗅神経の細胞を侵す



さらに、自律神経の副交感神経である迷走神経がレビー小体に侵されることで、胃腸症状である便秘や、循環器症状である血圧の低下などが起こります。また、レビー小体が鼻粘膜から嗅神経へ拡がり侵すことで、嗅覚が低下して匂いや香りに鈍感になることもあります。

脳脊髄液の循環促進でレビー小体形成を防ぐ!!

二〇一九年に大阪大学などの研究グループが、パーキンソン病患者の脳脊髄液から、原因タンパク質である α -シヌクレインの凝集体



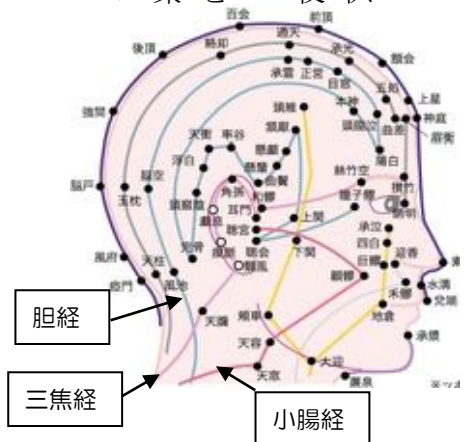
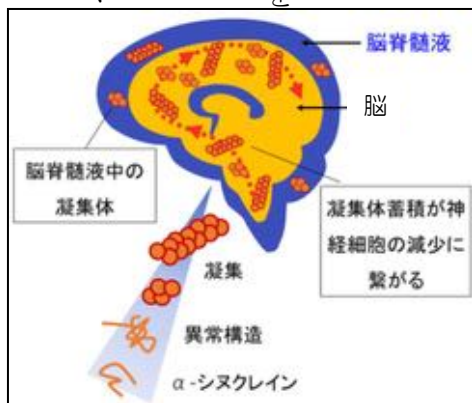
を検出しました。これによって、パーキンソン病の診断や重症度の評価、治療法の開発に貢献することが期待されます。

このことから脳脊髄液の循環を促進して、アルシヌクレインという不要な産物を流し去ってしまうことが、パーキンソン病の予防や進行の抑制につながると考えられます。

脳脊髄液は、外部からの衝撃に対して、豆腐パック内の水のように脳と脊髄を守る役割と、糖分やタンパク質などの栄養分の供給、さらに不要となった代謝産物や老廃物の回収の役割があります。脳脊髄液は血液を素にして、脳室の脈絡叢で一日におよそ六〇〇ml産生され、脳と脊柱管内をゆっくりと循環して神経細胞の生存環境を維持して、血管やリンパ管に吸収されています。一日に四回ほど循環して入れ替わっています。

脳への血流アップで神経細胞を守る

脳脊髄液の循環を促進するためには、その素となる血液の循環を改善する必要があります。特に頸動脈は、脳への血液供給だけでなく、脳脊髄液の産生に重要な役割を担っています。鍼灸あん摩マッサージ治療では、頸部の小腸経や胆経、三焦経を疎通することで、脳血流と脳脊髄液の循環を促進します。これによって、中脳などの神経細胞でのアルシヌクレインの凝集を抑えて、レビー小体の形成を防ぎます。

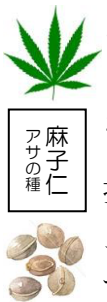


頭部には多くのツボがあり、これらを上手に刺激します。

パーキンソン病と鍼灸・漢方

パーキンソン病が進行してレビー小体の形成が多い状態では、神経細胞のダメージが大きく、治療は困難となります。しかし、鍼灸あん摩マッサージ治療によって、その症状である筋固縮や筋緊張、腰痛など筋肉の痛み、下肢のツツパリ感、歩行障害、振戦などを軽減することは可能です。漢方薬は血流を良くし、脳や筋肉に栄養を送り、さらに老廃物の解毒代謝を促進します。自律神経症状である便秘や血圧の乱れ、睡眠の質などを改善することもできます。病院でのお薬を服用しながら、漢方薬と鍼灸治療で、症状を緩和して進行を少しでも遅らせることを目指します。

漢方薬



麻子仁丸(ましにんがん)：パーキンソン病の便秘に！

腸管の緊張を緩め蠕動運動を促進させて、便通を良くします。筋肉の緊張を緩める作用もあります。

抑肝散(よくかんさん)：手足の振るえや神経過敏、落ち着きのなさに！
自律神経や運動神経などを調整して、心身を安定させます。

ツボ



手の振るえ：腕の外側で肘と手首の中央からやや肘よりの四瀆(しとく)をやや痛さを感じるぐらい強く指圧します。

足のツツパリ感・小刻み歩行：すねの外側にある陽陵泉(ようりやうせん)を親指でやや強めに押しながら、その周辺からすね全体をマッサージします。足攣れの解消にも良いです。

